

「阿知須の美しい景観」

山口県景観アドバイザー 沼田 登

=====
山口市阿知須地区で開催しました地域景観ワークショップにおきまして、山口県景観アドバイザーを務めていただいております沼田 登氏より、景観とまちづくりについて、ご講演いただきました。

=====
開催日・場所

- ・平成18年10月22日(日)
 - ・中村公民館
- =====



まず景観って何ですかって私どももよく聞かれますが、いろいろな仕事の方から「食べられるんですか？」って話まででできます。それに答えていますことを今から話しますが景観って漢字2つで書くと難しいですが、簡単に考えていただくと良いかと思います。

通常、みなさんが写真でとられる自然の風景とか、それから里山の景色とか、そういうもてまがいございません。ただ、写真をとらなくても、私たちがキレイだと言わなくても、山は山として存在し、海は海として存在しています。ところが見る主体である人間がそこに関わることによってそれは景観という価値を持つことになります。このように、見方によって価値が変わるものであるといえます。「景観」という言葉は人間と一緒にあるということを感じておいてほしいと思います。そしてサルやシカなどは山の中に住んでおりますが、景観がきれいだなと感じながら生きているわけではないと思いますので、人間の独特の感じ方じゃないかなと思います。先ほど河野先生のお話の中に、生活そのものであるとお言葉がありました。まさにそれに近いものであるということを感じております。



「おいしい景観」という話をする前に、景観はもちろん食べられませんが、「味わう」というように表現されることがあります。里山景観を味わう、歴史的町並みを味わう、そういうような、ただ見るというだけのものではない。そういう感覚でとらえられるものであります。今、県では、「山口県景観ビジョン」の中で「五感で感じる印象」を景観として評価されておまして、景観は景色を見る、よい香りを嗅ぐ、心地よい音を聞く、つまり、視覚、臭覚、聴覚を使って感じるものです。さらに、その場所に心地よい風が吹いてくるとか、潮風の香りがして潮風があたるとか、そういう肌で感じる景観、触覚ですね。それから地元の味を感じながらながめる景観、味覚というものもあります。そういうふうに、生活そのものであるという言葉と一緒になのですが、五感で感じるという観点で、今日のワークショップで景観を探していただきたいと思います。さらに、県では、生活景といわれる身近な生活の景観というものを大切にしていきたいということが、景観をもとにした町づくりに役立っていくものじゃないかと考えておられます。生活景とはどういうものか



という、いつも見慣れた地元の景観で先人たちが大切に守り育ててきたものです。しかし、身近すぎて、その重要性が認識されにくいものでもあります。しかも1度失ってしまうと同じものは2度と戻ってこない、というはかないものでもあります。

井関川のカモの写真です。阿知須には非常にすぐれた川が2本流れているということでありましたが、この特色としては宇部に続く台地の方から、風化した花崗岩の砂をたくさん押し流してきて、下流に集積させることができる川です。非常にきれいな砂地の景観を今でも作っています。ここにこういったカモが遊んでいるわけです。地元の人ですとあたり前と思っておられると思いますが、外からきた我々は見たらびっくりします。カモが平気で川の中で遊んでいる、どなたかが飼っておられるのですかと聞いたところ、「名前をつけてエサをやられている方はいるみたいですけど飼っているわけでは



飼っているわけでは

ない。」と言われました。河川がなくなってしまうと、こういう風景もなくなってしまうと思います。

それから漁港の写真があります。これは逆にいうと港の風景がなくなると同時に、コンクリートで護岸を固めてしまったので阿知須に来られてもあまり海を意識できないと思います。ただし生活の中では今でも魚市場があって10軒くらい、船乗りの方たちもいるそうです。この間も「阿知須まるごと博物館」のイベントで、市場の中で人を集めてセリをやっていて、なんとザル1つが40円でした。ここでは、こういう風な情景をまだ見ます。こういう風な生活を大事にしていくことが新しい町づくりを考える上で役に立つものではないかと思えます。



阿知須の浦の原地形がどのようにできてきたのかということ町史から調べ、気づいたことをかきました。まず阿知須の裏は大きくは洪積層と沖積層と砂丘でできています。特に中心市街地が砂丘の上でできています。私どもは中川家の再生工事の時に土を掘りましたが、50cmから下はすごくきれいな砂の層が現れました。余る程ある砂は、地中にもたくさんあり、砂の上に造られた町であるといえます。もう1つは埋立により、海岸線が推移します。江戸時代から開作がはじまって、早くは1706年に開作されています。1726年には海岸線が広がり海に沿って道があったとの記録があります。そして大正2年には港の前の大きな部分、昭和2年に中川家の裏が埋め立てられて、そのたびにどんどん海岸線がなくなっていきました。浸食されやすい花崗岩でできた洪積層の丘も非常にきれいで、浸食された花崗岩がいたるところにつくった奇形の岩が見られるのも見どころだと思います。



居蔵造は旧中川家が代表的な建物でして、その改修にたずさわりましたので、そのときのスライドと手元の資料で居蔵造の説明をいたします。中川家の全景です。特徴的なところは柳井にもある、大壁・白壁。それからナマコ壁。柱が見えていませんが柱の外側に土が塗られ非常に厚い壁になっています。耐火の建物を造るということで江戸時代から発達してきた工法です。風が強いので棒しっくいという瓦をおさえるしっくい屋根瓦の端にはってあります。平瓦を押える部分が丸くできていることからナマコ壁といえます。こういう風に左官さんが一個一個手作りで形をつくっていきます。黒いところが瓦です。まず平瓦を斜めに貼り、その目地をしっくい埋めるといいます。現地でもっときれいなものを探し出して、それで形を復元して残していきま



正面はかなり広く全開口になっており、通りから家の中が見え、座敷を通して

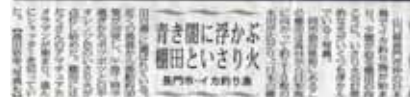
裏庭まで見える、というのが特徴です。今ではしめられる家
がなくなつたので復元したのですが、引き戸の上にしっく
いはった防火戸です。床の間の上の部分の屋根をあげてお
り、ここに床の間があると判るようになっていまして、床の
間屋根と呼ばれています。持ち送りは家々でいろんなデザイ
ンを造っているのでこれもまた見どころだと思います。2階の七宝繫ぎもいろんなデザイン
があります。それから銅板で作っていただいたのですが家紋が入っており、太一文字の家紋
がこういうものが瓦にありましたので、中川家では樋のアンコウにあります。もうひとつ、
しっくいに並んで特長があるのは長石です。廻船業を営んでいたため船が使えたということ
で、秋穂の方から長石を切り出してもってきたといわれています。どうしてこのような長石
が必要になってきたかということここに引き戸がとおるわけです。土戸の引き戸というのは、
大変厚く重たいので、木ではもちませんから、石を敷居にして使っていたようです。長いも
のでは8mぐらいのものまであります。これらも見どころとなっています。



次に、おいしい景観です。これは徳佐のりんご園です。今
の時期は、9号線を走りますと、りんごが両側に見えて、非
常によい景観をもっています。みなさんりんごのことにつ
いてフジぐらいしか知らないでしょうけど、30種類ぐら
いとれまして、誠においしい。そういうものが山口県にはた
くさんあります。須佐にある「みことイカ」の直売漁港で
す。7月の初めから9月の末までセリが行われます。こ
ういう浦の景観の中でセリがあって、それを一般の人が買
えるというおもしろい企画があります。これは漁船の船長
さんたちがはじめたそうで、非常にきれいな所で泳ぐイカ
を目にすることができます。このときは残念ながらイカの
姿は見られなかったのですが、かわりに赤米のある景色
をみることができました。長門の油谷湾の棚田いさり火は、
山口県でも最も有名な景観のひとつだと思つていますが、
このあたりから「おいしい景観」を考えだしました。ここ
でおいしいものを食べたいと感じたのがはじまりで、ここ
でイカ飯が食べられるといいなと思つました。これは朝日
新聞で今年の6月、第1面を飾つたもので、各地にこ
ういうものがあるのではないかなということで、今、私の
所属している「NPO まちのよそおいネットワーク」で取
り組み始めたところです。



なかなかおいしい景観といつても分かりにくい所がある
と思つるので、全国ではどのようなものがあるのか調べて
みますと、夏の暑いころにもものすごく涼しい所でたべら
れる京都の料理屋さんがある、とテレビで見て、すぐ京都
のほうへとびました。京都の鴨川の上流の貴船という、ま
ちの中から電車で30分ぐらいのところにある、山口県に
もないような、秘境の土地で、そこの1本の川沿いに料
理屋があつて川岸をおりて行くと川底に座敷が造つてあ
ります。その日は36 ぐらいあつたのですが、そこは2
4 ぐらいで、そういう涼しい所で食事することができま
した。食事も金額が高いです。おいしい料理をおいしい
景観の中で食べさせていい料金をとる、うまい商売をや
っています。



さらにうまいのが、浴衣を 5000 円ぐらいで売っていて、浴衣で食事をする事ができる。さらにおいしい商売をしておられる。こういうものを見て、地域づくりに活用できるのではないかなと、感じています。

最後に、今、国では美しい国づくりといわれておりますが、山口県でも美しい山口づくりを政策イメージにあげています。そこに「味」を一文字つけ加えるだけで、「美味しい山口づくり」ということになり、ダジャレではないですが、さらに阿知須で景観ワークショップを行うということで、「美味しい」という言葉が関連しています。日本中には美味しい食べ物を感じる景観がたくさんあります。そして、そこは誰もがいいなと思うような景色でもあります。阿知須でも、2階部分のなまこの模様を刺繍で残して、店に飾って楽しんでおられる方もいて、私が言うまでもなく、美味しい景観を実践されている方がいらっしゃいます。さらに山口市との合併を記念したイベントで、旧中川家を仮オープンして、中でコーヒーをごちそうされました。またそれがおいしい。すがすがしい中で食べ物を食べるということで、おいしく景観を見ることが実感できました。そういうことで、おいしい景観が新しい町づくりに発展していく可能性があるのではないかと話をさせていただきました。

